

亜種異聞帯HAL 夢幻忘
却企業ハルトマン・
ワークス・カンパニー

巡人理音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「聖杯？ サークヴァント？ 挙句の果てには魔術だど!? 文明の象徴たる科学に頼らんとは、なんたるヤバン！ 決めたぞ、次はあの星を侵略するのであーる!!」

《OK・READY・》

《3——2——1——GO!!・》

目次

亜種異間帯HAL	夢幻忘却企業ハルト
マン・ワークス・カンパニー	—— 1

亜種異聞帯HAL 夢幻忘却企業ハルトマン・ワークス・カンパニー

『初めましてございます、皆さま。ご機嫌の程は如何で御座いましょう』

その通信は突然繋がった。

魔術的・科学的問わず、各異聞帯はおろか現在進行形で虚数領域を航行しているシャドウ・ボーダーにまで、だ。

突然の事態に、クリプターや旧カルデア職員が慌ただしくなる。

そうしている間にも、通信は継続している。不可解なことに、どんな手段を講じても通信遮断ができないのだ。

その原因は、他ならぬ当人によって暴露される。

『ああ、言っておきますが通信遮断は無意味です。すでにあなた方の通信は系統を問わず我々がアクセス権を奪取致しましたので』

その言葉は、様々な波紋を呼び起こした。

あるいは驚愕。あるいは唾然。あるいは焦燥。あるいは興味。

そんな下々の反応など知ったことではないといった様子で、通信の主——鮮やかなピ

ンクの髪をした女性は続ける。

『さて、申し遅れました。ワタクシ、ハルトマンワークスカンパニーにて秘書を務めさせて頂いておりますスージーと申します。おそらくこれが最初で最後の挨拶となりますので以後お見知りおきはせずとも結構です』

一礼。

そして、彼女がカツンとヒールを鳴らしながら一步横にずれると、そこには驚きの光景が広がっていた。

それは……

『地球には、「魔術」「聖杯戦争」「サーヴァント」などという技術が存在すると聞きました』

キリキリと、周りに取り付けられた歯車を噛み合わせる黄金の盃。

そう、それは——まぎれもなく、聖杯そのものだった。

『こちらは、我々ハルトマンワークスカンパニー謹製の聖杯——形式番号SN—UBW—666「ホーリーグレイル」。魔術というものが元来持ち合わせている不安定さというものを徹底的に排除したものです。お値段なんと150万ハルトマニー』

ありえない、と誰かが叫ぶ。

そう、聖杯とは数多の魔術技術、その粹を集めて結晶化させた、まさしく魔術の歴史

そのものなのだ。おいそれと再現を、しかも一切神秘の絡む余地がない科学技術で再現などされてたまるか。

かのアインツベルンでさえ、その作成には無数のホムンクルスを食い潰す必要があったという。

だが、現実としてそれは目の前に確かに存在している。

スージーは通信相手の反応を見て、クスクスと笑いながら言った。

『……ふむ。その様子では、皆さま見た目だけの紛い物と疑ってらっしやる様子。大変結構、この手の旨い話には裏が付き物ですからね』

——ですが。

パチン、とスージーが指を鳴らす。

『これは紛れもなく聖杯そのもの。御覧に入れましょう、これがその確固たるご証拠にございます』

そういつて、彼女は懐からタブレット端末を取り出し、ポチポチと弄り始めた。

それに呼応するかのように、機械仕掛けの聖杯が光を放ち始める。

そして、膨大な光の奔流が画面を埋め尽くした。

それは見た者すべての視界をホワイトアウトさせ、文字通り視界のテロのような状態を生み出していく。

やがて、ホワイトアウトしていた視界が回復する。

そこには衝撃的な光景が広がっていた。

『……サーヴァント・キャスター。私の名はポール・デイラック』

姿を現したのは、ドロドロとしたコルタルのような何かと、そこに立つ黒い少女。それが、老人にも若者にも、男にも女にも、憤怒にも喜悦にも聞こえる声を生み出している。

今度こそ思考がフリーズした通信相手をよそに、ドロドロ——キャスターとスージーは言葉を交わす。

『……それで？ 私のようなひねくれもの呼び出したマスターは君か』

「ええ、当然です」

『そうか。用があるなら呼んでくれ、数式の証明くらいなら手を貸そう』

そう言つて、キャスターはさっさとどこかへ行つてしまった。

その様子を見届けたのち、スージーは通信画面へと向き直り、ある宣言を行う。

即ち——宣戦布告、略奪開始の宣言だ。

『これより、我々ハルトマンワークスカンパニーは、ヤバなゲンジウミンたるあなた方へ向けて宣戦布告いたします。降伏・講和の期限は一週間後を期日いたしますので、どうか前向きなお返事を期待しております』

その言葉を最後に、通信は一方的に切斷された。

それと同時に、どうしようもない衝撃が地球そのものを揺らぐ。

震源は南極——だが、直接の原因はほかにある。

その原因とは、地球に寄り添うように現出した超巨大な鋼の塊。

圧倒的なその威容は、まさにキカイ仕掛けの惑星と呼ぶに相応しく、しかし万有引力の法則に則った莫大な引力が地球を襲う様子はない。よもや、引力そのものを打ち消す技術すらも既に確立済みだというのか。

さらに、どうやらこの星そのものが疑似的な異聞帯の要——空想樹としての役割を果たしているらしく、見る見るうちに南極は機械仕掛けの無機質な大地へと変貌して行く。

……斯くして、地球にはありえざる八番目の異聞帯が姿を現した。

異聞深度など計測する必要もなくEX^{評価段階外}。たとえIfの歴史だとしても、決してあつてはならない両者の邂逅。

その名は『夢幻忘却企業 ハルトマン・ワークス・カンパニー』。

そして、その異聞帯のカギを握るのは——

「……」

——いったい何者か。